

【大津委員】 どうもそこに関する私の発言はやぶ蛇だったようですが、蛇を出した以上、もうちょっと松本さんのお考えを聞いておきたい。松本さんは日本における英語教育において、訳読——文法はちょっと置いておきましょう、ここは絶対必要だとおっしゃると思う——訳読というものは、なるべく避けるべきであるとお考えなのか、お考えであれば、それはなぜかということをお教えください。

【吉田座長】 松本さん、どうぞ。

【松本委員】 ここで個人的な英語教育観について話すのはいかがなものかと思えますけれども、私が申し上げているのは、国の方針がぶれないことをお願いしたいということです。現場が混乱してしまうので。その点だけです。個人的な学習として訳読をする必要性をすべて批判するわけではないですが、教室という場でみんなで訳読するという指導法は減らしていく方向で今まで現行の学習指導要領下では皆さん御努力されているので、それに対してストップをかけるようなことはしない方がいいのではないかということなのです。

【吉田座長】 ということですが、じゃあ大津さん、どうぞ。

【大津委員】 そうすると、要するに「偏ることなく」というのを、文字通り理解すれば、全くの問題のない御見解だというふうに理解できると思うのですが、それはいかがでしょうか。

【吉田座長】 松本さん。

【松本委員】 教室での指導ということであると、少なくとも今は避けるという方針であるということは間違いないと思います。

【吉田座長】 はい、大津さん。

【大津委員】 教室の中での訳読は避ける方針というのは、国の方針なのでしょうか。仮にそうだとすると、その根拠はどこにあるのでしょうか。

【松本委員】 私ですか。

【吉田座長】 はい、じゃあ松本さん、どうぞ。

【松本委員】 飽くまでも私は学習指導要領に書かれてあることについて説明しているつもりですので、私が説明してもよろしいのでしょうか。事務局の方で引き受けていただけますか。

【吉田座長】 事務局の方で、はい。今の学習指導要領の文言の問題で、また解釈の問題ですよね。その辺はいかがですか。

【圓入室長】 少し細かくなって恐縮ですが、学習指導要領、お手元にありますので、御確認いただければと思います。こちらの紙ファイルのタックがついている三つ目に学習指導要領とありまして、高等学校の学習指導要領の解説、外国語編、英語編でございます。この43ページを御覧いただきたいのですが、授業は英語で行うことを基本とするということを、この解説の方で丁寧に書いてあるところでございます。ここも前に御説明いたしましたように、これは方針を変更するというのではなくて、現行を維持するという説明をさせていただいておったかと思えます。

で、43ページの後段の方になります。ここに書いてありますのは、授業を英語で行うことを基本とするということは、英語による言語活動を行うことを授業の中心とするというように書いております。ですから、以前も御説明いたしましたけれども、全て英語だということを言っているわけではございません。ただ英語の科目の特質というのをここに書いておりますけれども、言語に関する技能そのものの習得を目的とするところであるが、しかしこのような技能習得のため必要となる英語を使用する機会は、生徒の日常生活において非常に限られているので、そのようなことを踏まえれば、英語に関する各科目の授業においては訳読や和文英訳、文法指導が中心とならないように留意し、生徒が英語に触れるとともに、英語でコミュニケーションを行う機会を充実することが必要と書いてございます。ここを解釈いただければということでございますので、多分先生方がおっしゃっていただくのは矛盾はないかと思えます。

【吉田座長】 よろしいですかね。多分、この偏ることなくという解釈でよろしいのではないかなと私は思いますが。

じゃあ大津委員、どうぞ。

【大津委員】 私がここにこだわっているのは、実際に教室で英語を教えられている先生方にとって、この部分というのはとても重要だと思うからなので、で、今室長に読んでいただいた43ページの項目4の本文2段落目、下

から2行目、「訳読や和文英訳、文法指導が中心とならないように留意し」という、ここがとても重要で、つまり一言も訳読というものを教室で行ってはいけないというようなことは書いていないという、このところは是非この場で確認しておきたいと思います。それでよろしいですね。

【吉田座長】 はい、それでいいのではないかと思います。よろしいですか。
はい、じゃあ石鍋委員。

【石鍋委員】 今の解説と同様の趣旨を、実は中学校などの現場でも伝えているところです。実際に文法訳読をやっている教員、いなくはありませんが、やはり発話で英語を多くしようという教員が増えている事実があります。今の解説の43ページが一番下の段から、次のページに行くくだりなのですが、文法について説明することに偏っていた場合は、その在り方を改め、授業においてコミュニケーションを体験する言語活動を多く取り入れていく必要があると。

中学校のように語彙数の少ない、特に中1ぐらいの非常に語彙数が少ないものを扱うときに、文法訳読とかそういったことをやると、英語を使う時間がなくなってしまうのですね。やはりそういったときほど、やはりきちんと英語を使ってやっていく。文法訳読が違う捉えをされると、中1の段階から非常に難しい状況に陥る。そんなような気がしていますので、やはりこの今の室長が説明していただいた部分をきちんと伝えていく、そのことが非常に重要になるのだろうなと思います。

【吉田座長】 じゃあ室長、どうぞ。